

イイ男は結婚しているのか

大阪大学社会経済研究所 大竹文雄

1. 負け犬

ベストセラーになった『負け犬の遠吠え』の中で酒井順子氏は、「未婚、子ナシ、30代以上の女性」を負け犬と呼んだ。30代以上で既婚、子アリの女性は、勝ち犬である。酒井氏は、負け犬の大量発生の原因には不倫があるという。「軽い気持ちで行った不倫が、独身女の婚期を遅らせる・・・だけならまだしも、その婚期を奪うということもままある。たとえ、不倫を継続しなくとも、不倫によって年上の男性の経済力や包容力等の味を一度しめてしまった女性の目に、同年代の男性がつまらなくみえてしまうことも、ままあります。(酒井 2004,19 頁)」

そして、「負け犬」が将来結婚できるかという議論の中で「マトモな男の人はもう絶対結婚してるって。・・・まともな人がいいんだったらもう掠奪しか手は無いと思うよ。(酒井 2004,102 頁)」という発言をしている。

酒井氏の主張には 30 代の独身女性から絶大な支持がある一方、結婚し子供を持った女性の中には「勝ち犬」といわれても馬鹿にされているだけで、どこか違和感があるという意見をもっている人が多い。

ここでは、「マトモな人はもう結婚している」という指摘から、結婚と仕事の関係について考えてみたい。女性にとって魅力的な男というのと、仕事ができるかどうか、というのはどういう関係があるのだろうか。「マトモな人はもう結婚している」という意見は、本当に因果関係をもとにした発言だろうか。ここには、相関関係をもとに因果関係を議論することの危険性がある。

酒井氏が指摘するように、30代後半になるとマトモな男は結婚している、というのは、マトモな男から結婚していくのであれば当然だ。結婚市場では魅力的な人から結婚しているはずだからだ。ここでは、マトモな男・魅力的な男というのが変化しない固定的なもので、結婚は魅力的な度合いによって決定され则认为られている。しかし、結婚したからマトモな男になったという可能性も否定できない。つまり、結婚が原因で、男の魅力はその結果であるという可能性である。実際、奥さんが似合う服を選んで、身だしなみを整え、魅力的な男にして、仕事にも専念できる環境を作っているケースも多いだろう。もしそうなら、負け犬女性は、男は結婚するとマトモになるという因果関係を理解していないからいつまでたっても結婚しない、ということになる。このあたりが、「勝ち犬」女性たちの、酒井氏に対する不満だろう。はたして現実はどちらなのだろうか。

2. マリッジ・プレミアム

マトモな男という定義の中に経済力がある男ということも含まれているだろう。ここでは経済力のある男と結婚の関係について議論してみよう。経済力のある男が結婚しているのか、それとも結婚によって経済力が高まるのだろうか。議論を整理するために、学歴、職業、年齢といった通常所得に影響があると思われる部分は同じ男性同士を比べて、結婚と所得の関係を考えることにしよう。結婚が所得に与える純粋な影響は、経済学ではマリッジ・プレミアムと呼ばれており、アメリカでは多くの実証研究が蓄積されている。アメリカにおいては、男は結婚しているとより高い賃金が得られるが、女性は結婚していても独身女性と賃金は変わらないか、わずかに低下するという結果が得られている。アメリカの男性のマリッジ・プレミアムは大きく、様々な個人属性を揃えた上で、結婚している男性は、結婚していない男性よりも10%から50%も賃金が高い。日本においては、女性に明確なマイナスのマリッジ・プレミアムがある（川口（2001））。日本の男性についてもおそらくプラスのマリッジ・プレミアムがあるだろう。その意味で、「結婚している男は、経済力がある」という酒井順子氏の観察は日本でもアメリカでも正しい。

では、どうして学歴、職業、年齢を考慮しても「結婚している男は、経済力がある」のだろう。4つの仮説を考えることができる。

- （1）分業仮説：結婚すると男性は家事から解放されて仕事に専念できるため生産性が上がり、女は家事負担が増えるので仕事の生産性が低下する。
- （2）労働意欲仮説：結婚した男性は、家計を担うため責任感が出て、労働意欲が高まり生産性が高くなる。
- （3）差別仮説：雇い主が結婚した男性を優遇するように差別しているために、結婚した男性の賃金が高くなる。
- （4）隠れた魅力仮説：学歴や職業等では観察できない特性が労働市場での生産性を高めていると同時に、その特性が結婚市場でも魅力を高めている。

このうち最初の3つの仮説は、結婚から所得への因果関係を示しているが、4番目の仮説では結婚が所得増をもたらしているのではない。4番目の仮説で結婚と所得の相関をもたらすのは、計量経済学者には観察できない魅力が、結婚市場でも労働市場でも同時に高い評価を得るのが原因である。いわば賃金を説明すべき変数の中に本来含まれるべき「魅力」という変数が含まれていないことが見かけ上のマリッジ・プレミアムを発生させていたのである。この場合には、仮に「魅力」を賃金を説明すべき推定式に説明変数として入れることができたならば、結婚は賃金になんら影響をもたらさないことになる。つまり、魅力ある男は結婚もしているし所得も高い、という酒井氏が嘆く状況は、この「隠れた魅力」仮説にあたる。

3. 一卵性双生児でも結婚によって賃金格差は生じるか

隠れた魅力の影響を取り除いてもなお結婚から賃金への因果関係が残れば、「隠れた魅力」だけではマリッジ・プレミアムを説明することはできないので、「いい男は必ずしも結婚していない」ということになる。

「隠れた魅力」をコントロールすることはできるだろうか。もし、男の魅力が時間を通じて変わらないものであれば、同じ人物を追跡調査して、結婚前後で賃金上がるかどうかを検証すればいい。このアイデアで、実証分析をした研究者は何人もいる。しかし、残念なことに、研究結果はばらばらである。ある研究者は、追跡調査したデータで、結婚前後の賃金変化を調べると、結婚によって賃金は変化せず、マリッジ・プレミアムは消滅したと報告している。別の研究者は、同様の手法を用いても、マリッジ・プレミアムが観察されたと報告している。このような手法が必ずしもうまくいかないのは、結婚のタイミングが賃金上昇のタイミングに応じて決まっている可能性があるからだ。もし、男性が一時的に賃金が高まったときに結婚するとすれば、賃金が高まったのは一時的で結婚した後は賃金は低下してしまうかもしれない。逆に、昇給することが分かってから結婚を決めている場合であっても、あたかも結婚が賃金上昇をもたらしているように観察されてしまう。そういう意味で、同一男性を追跡調査したデータを利用したとしても、結婚から賃金への因果関係を完全に明らかにすることはできないのである。

「隠れた魅力」が同じで、結婚しているかどうかだけが違う男性を比較する方法は、他にないだろうか。アントノヴィックス教授とタウン教授は、一卵性双生児の兄弟を比較すれば「隠れた魅力」をコントロールして純粋に結婚の有無が所得に与える影響を分析することに気がついた。そして、実際にアメリカの双子に関する社会調査のデータを使って、分析したのである。136ペアの一卵性双生児のデータをもとに、結婚が賃金に与える影響を分析したところ、双子であることを無視すると、学歴・年齢・勤続年数・地域などをコントロールした上で、結婚しているものは現在結婚していないものより19%賃金が高かった（19%のマリッジ・プレミアム）。ところが、一卵性双生児の間での賃金格差を分析すると、マリッジ・プレミアムはさらに拡大し、結婚しているものは結婚していないものより26%も賃金が高くなっていることが示されている。つまり、「隠れた魅力」が全く同じであると考えられる一卵性双生児の兄弟であっても、たまたま早く結婚したものはそうでないものよりも26%も賃金が高いのである。少なくとも外見上や遺伝子レベルの能力が同じ二人を比較しているので、いい男は賃金も高く、結婚もしているから、マリッジ・プレミアムが観察されたのではない。むしろ、「いい男は必ずしも結婚していない」し、「結婚によって男は仕事ができるようになる」というのが正しい。

負け犬女性は、まだまだあきらめるべきではない。ダメ男に見えても、結婚すればいい男になる「隠れいい男」はまだまだいるはずだ。もっとも、負け犬女性にしてみれば、そんなことはとっくに分かっていて、「勝ち犬女性が一生懸命いい男にしてくれた男性をいいとこ取りする方が手っ取り早いよ」ということかもしれない。

参考文献

- Antonovics, Kate and Robert Town(2004) "Are All the Good Men Married?
Uncovering the Sources of the Marital Wage Premium," American
Economic Review, Vol.94, No.2, 317-321
- 川口章(2001)「女性のマリッジ・プレミアム：結婚・出産が就業・賃金に
与える影響」、『季刊家計経済研究』51号、夏、63-71
- 酒井順子(2004)『負け犬の遠吠え』講談社